

Christopher Beckwith

The Tibetan Empire in Central Asia

—A History of the Struggle for Great Power
among Tibetans, Turks, Arabs, and Chinese during
the Early Middle Ages

松崎光久

本書奥附の紹介によると、著者 Beckwith 氏は一九八七年現在、インディアナ大学ウラヒンブロンタイ学科と近東言語文化学科の助教授であることがわかる。同時に同大の Director of the Tibetan Studies を擔當されていることが事情から著者の研究業績と相俟って、著者の最も得意とされる分野が、チベット學であることが納得される。實際著者 Beckwith 氏は一九八九年に成田山で行われた、第五回 International sessions on Tibetan Studies に参加、その際自身「Early medieval central / inner Asian History」"Comparative-Historical Linguistic of Tibetan and neighbouring Language"と専門分野の自己紹介をされている。著者の多彩な研究活動の一端は、一九七七年にインディアナ大で提出された學位論文「A Study of the Early Medieval Chinese, Latin, and Tibetan Historical Sources on Pre-Imperial Tibet」以下、次に引用する、本書文獻目錄所収の業績のみから十分うかがえる。

“Tibet and the Early Medieval Florissence in Eurasia : A Preliminary Note on the Economic History of the Tibetan

Empire” *Central Asiatic Journal* 21, 1977, pp. 89—104.

“The Introduction of Greek Medicine into Tibet in the Seventh and Eighth Centuries” *Journal of the American Oriental Society* 99, 1979, pp. 279—313.

“The Tibetan Empire in the West” *Tibetan Studies in honour of Hugh Richardson*, 1980, pp. 30—38.

“The Revolt of 755 in Tibet” *Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde* 10, 1983, pp. 1—16.

“Aspects of the Early History of the Central Asian Guard Corps in Islam” *Archivum Eurasiae Medii Aevi* 4, 1984, pp. 29—43.

“The Plan of the City of Peace : Central Asian Iranian Factors in Early ‘Abbasid Design” *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 38, 1984, pp. 143—164.

以下、*Acta Orientalia*……など、發表要旨に基づいて論考が出ているが、確認が必要。また一九七九年には、*Journal of the American Oriental Society* に Pelliot 関係の出版物に関する簡単な書評なども載っている。

本書全體の構成は次の通りである。

目次

序文

謝辭

東洋諸語の轉寫および翻譯に関するノート

年代記に関するノート

略號表

序論 吐蕃王國以前のティベットの中央アジア

第一章 中央アジア進出

第二章 吐蕃王國の西部領域

第三章 アラブと西突厥

第四章 突騎施との同盟

第五章 唐とアラブ

第六章 末期の吐蕃王國

結論 ティベットの當時の中世初期ユーラシア

附録A ティベットの中央アジア支配度について

B ティベットの古史料中の西部領域について

C テュルクの支配氏族について

D オシ・オク（十箭）について

E フェルガナの Alutār 王について

支配者一覧表

用語集

書誌學的小論

文獻目錄

索引

以上のように本書は、整然とした全體構成のもと、吐蕃王國の興亡を中心に、それと中央アジアをめぐる諸勢力との關係を、有機的に説明しようとして書かれている。その著者の意気込みは序文冒頭に明記された。“This book is, to my knowledge, the first de-tailed narrative history of the Tibetan Empire in Central Asia

written in any language”からも充分にうかがわれよう。加えて思うに本書は、確かに専家の手になる研究書であるが、當該分野の研究者のみに留まらず、廣く歴史學關係者全般を意識して書かれているようである。

次に構成に従って氣づいた點を述べたいが、序論から結論に至る本論に關しては、後に改めて問題點を考察するので、ここではとりあえず本論にあたる部分については、内容概説に留める。

「東洋諸語の轉寫および翻譯に關するノート」は、本書においてティベットの語やアラビア語の史料が、原典に基づいて使用されていることを示唆している。もっとも本書で扱われている文獻史料について言へば、既に歐米における原典研究も進んでおり、とりわけ吐蕃王國に關するものにあつては、周知のように日本においても、その成果に負ひそれを凌ぐ研究が行われている。従つて本論中での史料クリティック類の割愛も、先人の業績を消化吸収した上に立たれた著者が、紙數の制限や讀み易さを考慮された結果と思われる。ただ、ティベットの語の轉寫について言へば、文字の機械的なローマナイズだけでは、少し不親切な感もする。著者が本書を、ティベットの史の研究者以外にも廣く提供しようとするからには、表記と發音の差異などを考慮して、固有名詞で一般的な呼稱が定まっているものなどについては、發音記號を附すなどしてはどんなものであるうか。

「年代記に關するノート」では、年代の換算と關連して、諸事件發生の正確な時期を把握することの重要さが指摘されている。本書では第一章の一八頁で、某年七月に注記して六〇八年八月一七日から九月一四日までとしたものの以下、隨所に西洋曆の日附が使用されている。それらは著者が『資治通鑑』中の干支を換算されたもので

あって、日附は中國科學最新の成果である『中國史曆日和中西曆日對照表』（一九八七年、上海辭書出版社）とも見事に一致している。ただし『中國史曆日和中西曆日對照表』の換算は、六三四頁の「明神宗萬曆一〇年にも注記されているように、ユリウス暦である。一五八二年以前の西洋暦はユリウス暦を使用しているから、唐代にそれを適用しても別に悪くはないが、その旨の注記が欲しい所である。ついでに唐曆に關して言うと、次のような不注意或いは認識不足が見うけられる。著者は三〇頁で、顯慶年間の説明を、*February 1, 656 to February 4, 661*」としており、確かに顯慶元年正月の始めは、ユリウス暦六五六年二月一日であり、顯慶五年は、六六一年二月四日で終っている。しかし顯慶元年について言えは、同年正月の壬申に改元されるまでは永徽であり、また顯慶年間の終了は、顯慶六年二月乙未に龍朔と改元される時點に置くべきであらう。ユリウス暦によれば、六五六年二月七日から六六一年四月三日まで、グレゴリウス暦で換算すると、六五六年二月一〇日から六六一年四月六日までが、顯慶年間ということになる。

「略號表」によると、著者は中國史料として、近年の刊行物を使用されているようであり、そのことは「文獻目錄」の *Classical and Medieval Sources* に、同一の書名が列擧されている點からも確認される。因みに略號表の初めよりいくつかの中國史料を、原本と思われるものを附記しながら擧げてみる。

CCTC

Li Tsung-tung ed. *Ch'un chiu tso chuan chin chiu chin*
i. 3 vols, Taipei, 1971

李宗侗『春秋左傳今注今譯』

CS

Ling-hu Tefen, *Chou shu*. 3 vols, Peking, 1971; repr. Taipei, 1974

令狐德棻撰『周書』

CTS

Liu Hsü, *Chiu T'ang shu*, 16 vols, Peking, 1975

劉昫撰『舊唐書』

CTW

Ch'in ting ch'üan T'ang wen, 21 vols, Kyoto, 1976

『欽定全唐文』中文出版社

HHS

Fan Yeh, *Hou Han shu chu*, 5 vols, Peking, 1965; repr. Taipei, 1973

『後漢書注』

この内 CTW 以外は「文獻目錄」中に前述の分類のもとに列擧されているから、『春秋左傳今注今譯』は『春秋左氏傳』として使用されていることになろう。正史類は中華書局版かその再版であることが分かる。ところで略號 HHS は『後漢書注』となってくるわけであるから、それならば李賢なり劉昭なりへの言及が望ましい。通常、中國史料を扱うに際しては、その據って立つ原本や版本をまず考慮する我々には、若干粗雑に思われる史料選擇であり、全篇を通じて逐一、參考文獻の該當箇所を明記される著者の配慮も生きているのではないだろうか。

序論以下の本論にあつては、第一章から第六章までの各章は概ね歴史の流れを追って書かれており、それぞれの時期に歴史の展開を

牽引した主要な勢力の交代を目安とした章立てでは、各章のタイトルからも明らかであろう。

序論は、吐蕃王國成立前史の概況であり、ティベットの地域の特異性と、それが本書で扱われる時期の國際關係が端的に描かれている。

第一章は、ティベットにおけるヤルルン家の支配即ち吐蕃王國の成立から、七世紀後期に實現した、吐蕃のタリム盆地一時制覇までであり、第二章では、タリム盆地をめぐる吐蕃と西突厥系勢力との抗争を中心に、それが結果としてもたらした、吐蕃と唐との關係が考察されている。第三章は、西突厥勢力が唐に征服される過程と、これに代わるアラブ勢力の登場である。第四章では、まず西突厥系の遊牧勢力突騎施が、支配者蘇祿を得て、アラブ勢力を後退させた事情を述べ、後半ではその突騎施勢力の存在の下に展開された、吐蕃の對唐攻勢が論じられる。第五章では、突騎施勢力の崩壊と、それに伴う勢力版圖の塗り替え、即ち東西それぞれの唐とアラブの中央アジア進出と、その一歸結であるタラス河畔の戦い前後の様相が、吐蕃の動向をからめて説明される。そして第六章にあっては、八世紀中期から、ラン・ダルマの死を機に吐蕃が衰退する九世紀中期までが論じられるが、ウイグルとの抗争やカルルクとの關係など、中央アジア情勢との関連も、巧みに考察されている。

ところで、通常、内容全體をしめくくる結論であるが、著者はその多くを費して、また別な問題提起をされているようである。

「附録」は、著者が知見として特に強調を望まれる關連事項で、本論中で既に部分的に觸れられたテーマを含め、新たに各タイトルのもとにまとめ直された數篇である。著者は本論中でも、特に比較

言語學的研究に關連して、いくつかの新見解を唱えられているが、後で改めて考察するように納得しかねるものが少なくなく、當附録中のC・Eなども、根據の弱い思いつきに近いようである。

「支配者一覽表」は、六二〇年から八四〇年代に至る、アラブ・ティベット・東部テュルク・中國の支配者の一覽表であり、フランク王國・ビザンティン帝國と言った、同時代の西洋世界を代表する二國の支配者が併記されている。これは歐米人の理解を助けるための配慮であり、著者の念頭に廣範な讀者層があるからであろう。それぞれの欄が依據した専門研究等は脚注にあり、ティベットは敦煌史料に基づくとなっているが、これに關しては後述するように、日本のすぐれた業績もある。東部テュルクについては、劉茂才と *milin* が參照されており、この欄に突厥（東突厥）と遊牧ウイグル國が收められている。それは良いとしても、突厥の空位時代を六五〇年から六七九年とする記述は、突厥第一可汗國滅亡の六三〇年から、六八二年に突厥第二可汗國が建てられる前までとすべきであり、突厥前半の支配者も、突厥第一可汗國が存在していたか否かの觀點に據るべきであろう。また、遊牧ウイグル國の支配者も、山田信夫氏の「九姓回鶻可汗の系譜」（『東洋學報』三三・三・四、一九五一年。『北アジア遊牧民族史研究』東京大學出版會、一九八九年、所收）以來、一般に認められているものとは、かなり違っている。

「用語集」は、本文中で言寫されている漢語を疎漏なく、それも極めて読み易い字體の漢字を使用して作成されていることなど、本書の見榮えを良いものとしている。

「書誌學的小論」は、文字通り當該研究に關してのエッセイであるが、内容としては寧ろ結論に置くべき性格のものと言えよう。

次に本論中に見うけられる問題點である。序論に關しては、漢代北アジアや宗教などに對する著者の認識、第一章以下については、各章に共通して認められる、著者の中國史料取り扱いや、比較言語學的方法上の問題點を第一章を中心に検討し、その上で結論とされる部分に及ばない。

序論冒頭でまず著者は、ティベツト語に關する氏の見解を呈示される。先に觸れた、一九八九年の成田でのティベツト學研究會でも、Beekwith氏は“A Reexamination of the Linguistic position of Tibetan”との發表をされており、この問題は一家言を持たれる著者の獨擅場であつて、もとより私自身も論評できる立場ではない。ただここで氣になるのは、「特に後漢時代の中國が、匈奴と羌の提攜の可能性に絶えず悩まされた」とある六頁の記述である。何となれば、これは著者も言及されているが、匈奴が月氏を驅逐してタリム盆地をその勢力下に收めたのは前漢時代であつて、『史記』大宛傳が記す、匈奴の使節が烏孫・安息間の通行で優遇されていた事情なども、匈奴と羌との提攜を、中國にとってより切實なものとしたはずである。武帝の河西四郡建置の意味がその點にあつたことは、『史記』匈奴傳が酒泉郡設置の目的を、匈奴と羌との交通路遮斷と明記しているのからも明らかであろう。確かに九〇年代にイリ地方に據點を移した北匈奴が、その後も約半世紀にわたつて、後漢とタリム盆地の支配を爭つたのも事實であり、それに先立つ班超の活躍にも匈奴は出てくるが、匈奴と羌との提攜を考えた場合、それは後漢よりも前漢にとつて、大きな問題となつていたと言わねばなるまい。また當時の宗教に關する著者の認識であるが、この序論九頁では七世紀初期として「中央アジアの經濟的な中心地であるソグデ

イアナでは、多くの佛教的要素を含んだ local creed が、佛教に代わつていた」とある。しかし、『大慈恩寺三藏法師傳』卷二に残る、六三〇年頃にサマルカンドを訪れた玄奘の記録などにも明らかのように、當時その地域で盛行していたのはゾロアスター教と言えるのではなからうか。宗教ついでに言うが、著者は第一章の二〇頁で佛教に注し“the name of one of the two types of Tibetan Buddhism”とされる。今日の所謂ボン教が、ニンマ派の影響下に一〇世紀頃から形が整えられたものであり、その信仰の中心に佛教があることは、現在ティベツト各地に見られるというルンタなどからもうなずかれはする。とは言え本來ボン教自體は、佛教とは異なる信仰であつたわけであるから、ティベツト學者の著者には、その點に言及した説明を期待したかつた。

因みに宗教に關連するものとして、第四章の九八頁では、次のような解釋が行われている。安西都護の杜暹が、突騎施蘇祿の公主である阿史那懷道娘の娘が遣わした使者の、「使者宣公主教」という行為に對して怒つたという事件である。著者は注において、この「教」を佛教と推定されるが、この字句を宗教と捉えるべきいわれは無い。それにこの事件の發生は、玄宗の開元元年間の七二六年であり、玄宗は道教を優遇しはしたものの、別に佛教を彈壓する政策はとつておらず、杜暹が個人的に佛教に反感を持っていたとも思えない。前後事情から見てこの「教」は、命令か指示といった意味であらう。

第一章以下でまず問題となるのが、本書のかんりの部分が依據している、中國史料の取り扱いに見られる不注意である。一八頁には六〇九年七月五日即ち大業五年五月甲午に、中國が吐谷渾を擊破し、two of their cities を奪つたとあり、この二鎮は赤水城と曼頭

城であるとの注が施されている。しかしこの二城が宇文述の率いる隋の軍門に降ったのは、大業四年七月中のことであって、大業五年五月甲午は、吐谷渾の仙頭王が隋に降伏した時期である。著者は、六〇九年の敗戦の結果、吐谷渾の支配者が Great Snow Mountain に逃れ、党項に亡命したとされるが、吐谷渾の支配者即ち伏允が、著者が Great Snow Mountain とされる、蜀西方の西雪山に逃れたのは六〇八年である。その後六〇九年の隋の攻撃で、吐谷渾の仙頭王が降り、伏允も國都である伏侯城を失った結果党項を頼ったのであり、その経緯は、著者が史料として示される『資治通鑑』を讀むだけでも、容易に理解できよう。

これに類した誤りとしては、第一章では特に二八頁のものが目につく。著者はここで、六六〇年秋に行われた、鄭仁泰による思結・拔也固・僕骨・同羅攻撃が、それに先立つ同年中の事件に對應して起こされたものとされる。その事件と言うのは、弓月が南の吐蕃及び北の咽頡と連合して疏勒を攻めて降伏させたと言うものであり、これが注に指摘されるように、『資治通鑑』卷二〇三の高宗咸亨四年二月丙午にある、弓月・疏勒の來降に關連して記されている。ところが、ここでは著者の識見、即ち『資治通鑑』がしばしば或る出來事の説明を過去に遡っての記述から行っていることを著者が充分に理解されている事情が、かえって誤解を生じさせてしまっている。著者は、續く「西突厥興亡可汗之世、諸部離散、弓月及阿悉吉皆叛。蘇定方西討也、擒阿悉吉以歸」が、六六〇年に果された、蘇定方の阿悉吉闕俟斤都曼の亂平定であることに着目されており、その見解は正しい。しかしその後文の、弓月が疏勒を降伏させたという記録までもを、六六〇年のできごととしているのは問題であ

る。この弓月による疏勒支配は、その結果發生した唐による蕭嗣業派遣と、それを懼れた弓月・疏勒の入朝という、一連の事件の展開の中で捉えられなければならない。これは咸亨四年即ち六七三年の事件と解される。もし、弓月の疏勒征服が六七三年に先立つ事件であったとしても、それは吐蕃の大攻勢をうけて安西四鎮が放棄された時期か、或いは疏勒と弓月が吐蕃を導入して于闐を攻撃した出來事と同時期のことと、考えた方が良いのではなからうか。前者は六七〇（咸亨元）年の、後者は『資治通鑑』によると六六五年、『冊府元龜』卷九九五外臣部交侵によると六六三年の出來事である。なお著者は、都曼と蘇定方の戦いに登場する「業葉水」を River of Sas として the Yaxartes と注記しているが、これは『資治通鑑』に胡三省が施した注の「自庭州輪臺縣西行三百許里、至業葉水」を見るまでもなく、見當違いである。

また著者は、中國史料を驅使されてはいるものの、相互に關連する内容を看過しての立論も見うけられる。一七頁には、ティベット人による外部世界に對する最初の接觸は、六〇八年と六〇九年に行われた中國への使節派遣とあり、これは『隋書』卷八三西域傳中の附國の條にある附國の隋への遣使をさしている。この附國について同傳は「漆皮爲牟甲」と記録するが、これと著者が一三頁で述べた吐蕃の軍裝 “warriors wore full suits of heavy iron chain mail” との關係はどう見られようか。なお附國と吐蕃に關しては、後述する山口瑞鳳氏の研究書中に、從うべき見解が述べられている。

中國史料關係の最後として、用語の不充分な理解の例を、第二章から二つ加えよう。四五頁で「大學生」を “One young student from the Imperial Academy” としたものである。これは具體的に

は、吐蕃對策の奏上者魏元忠をさしており、彼は七一〇年に七〇歳で没しているから、奏上當時の六七八年には四〇歳近く、若いとは言いかねよう。「大學生」に對する誤解に他ならない。

次に比較言語學的方法上の問題を考えたい。主に對象とするのは、著者が全篇にわたって使用される、トルコ語系の固有名詞を漢字表記から復元したものである。これらの用語のうち、著者が獨自の説を提示されたものには星印が附されているので、その中から第一章に現われたものを例にとつてみよう。中國史料中の漢字を並記しながら列舉すると、次のようになる。

Arski (阿悉吉)
Köngül (弓月)
Arsla (阿史那)
Tarduš (咄陸)
Nušadit (弩失畢)

阿悉吉については、*Theophanes Chronographia* 中にある、東ローマ帝國に遣使したとされる Askel に比定する有力説を、忘れてはなるまい。弓月は、松田壽男氏が「弓月についての考」(『古代天山の歴史地理學的研究』早稻田大學出版部、増補版一九七〇年、所收)で、これをモンゴル時代の *kangai* の前身とされており、論考中キョールテギン碑文東面三九行の *kängüras* (これは Thomsen 氏に従ったものであるが、ここでは以下の突厥文字については Tekin 氏の音寫によることにしたい) や『唐會要』卷七十二諸蕃馬印の康烏利などにも言及されているが、原音は特定されてはいない。Köngül と弓月には、少なからぬ隔りを感じるが、ともあれ阿悉吉と弓月に關する著者の復元は、積極的には支持出来ないものの、強いて否定

することもなからう。

著者は阿史那を Arsla と復元し、改めてこれに關する論を、附録 C でも展開されている。即ち Menandri Protectoris Fragmenta 中の Arslas に着目され、その語末の s をギリシア語の語尾として除外し、この語を導き出されたわけである。その際著者は、Arsla を非トルコ語起源の個人名に由來するとされる一方、Chavannes 氏が Arslas を「ライオンを意味する Arslan にあてているのをうけ、同様の關係を認められる。但し、ライオンの生息地を考慮して、この Arsla がライオンを意味するようになるのは、後年のことだとするのが著者の見解である。私も阿史那が、非トルコ語系の言語に由來する可能性を感じている。なぜなら、著者も附録 C において、突厥の始祖説話の一つとして引用する所の、「母方の姓を名乗った」という記録中の姓が、突厥族と通婚した、非トルコ系民族の姓であり得るからである。その場合に想定される民族は、ソグド人かタリム盆地オアシス諸國の住民といった、イラン系民族となる。しかし阿史那の語源としては、すでに Bailly 氏がそのホータン語の研究を通して明らかにされている *as'na* 「價值ある」なり、パフレヴィー語で「高貴な」とか「名門の」を意味する *asundag*, *asnidag* や *asāwār* などの近縁語か、場合によってはそれらに推定される共通母語といったものに由來する、イラン語系の語が妥當であると考える。因みに *as'na* に關連した "From some Saka dialect come Toch A *ašam ašanik*, Toch B *ašarj, ašamike*" とあるのは良く知られているが、ここで言うトハラ語の流通地カラチャールやクチャは、タリム盆地にあつてもとりわけ北方の遊牧世界と密接に關係する土地である。因みにライオンは、ホータン語では

serau、パフレヴィー語では shær であるが、このようにライオンの現代ペルシア語としても広く知られている shir にも通じる語がイラン語圏にはあったであろうから、asian はそのような語がトルコ語化したのではあるまいか。ともあれ私としては、阿史那を Arslan とする著者の説には従えない。

次の咄陸に對する 'Tarduš' という復元であるが、これは全く認めることは出来ない。なぜなら咄陸は、都陸・咄六などとも書かれる、tölis (先に述べたように、以下突厥碑文に關連する音寫は、部分的な語句の引用も含め、Tekin 氏の "A Grammar of Orkhon Turkic" によっている) の音寫であることは、論を待たなくてもないからである。そして、キェル＝テギン碑東面一三行やビルゲ＝カガン碑東面一二行に、"tölis tarduš budunuy anta imiş" とあるように、tölis と併稱されるのが tarduš (著者の表記では tarduš) であつて、tölis は東、tarduš は西を意味しており、後者の漢字表記としては、大度・達度・旦度・達頭等が知られている。このことは、ビルゲ＝カガン碑南面一三行から一四行にかけての "kisa tarduš bağlar külor başlayu ulayu şadpiti bağlar, öpra tölis bağlar apa targa[n] başlayu ulayu şadpiti bağlar" (西には tarduš の bağ 達が külor を先頭に şadpiti の bağ 達を従え、東には tölis の bağ 達が apa 達官を先頭に şadpiti の bağ 達を従え) という記録からも裏づけられよう。なお先の引用は、Tekin 氏の譯に従うと「(彼は) またその地において、tölis と tarduš の民を組織した」で、すなわち iltaris geyan (ビルゲ＝カガン並びにキェル＝テギンの父) のもと、突厥の東部と西部が、整然とした支配體制に編成されたことを言っている。氏の誤解は明らかである。

そして著者も書かれているように、西突厥の十部を東西に二分した際の呼稱として、西の五部をさす弩失畢が、東の五部を總稱する咄陸に對して出てくるのである。しかしこの弩失畢を Nusadpiti とする、著者の復元はどんなものであろうか。Clauson 氏によると 'sadpiti' は、"the entourage of the šad" と定義される。また突厥碑文の使用例としては、先に咄陸に關しても引用したものや、キェル＝テギン碑南面一行の "birya šadpiti bağlar, yirya targa[n] buyruq bağlar" (南には šadpiti の bağ 達、北には達官と梅錄の bağ 達) という用例が見られる。このように šadpiti は一種の官稱號であり、支配領域或いはその位置關係を意味する語中に含まれても、別に悪い譯はないのだが、弩失畢を Nusadpiti とするには、Nus の解釋をはじめ、語呂合わせ以上の説得力のある説明が欲しい。

これまで考察した五つの語も含め、トルコ語系・イラン語系固有名詞の原音への復元が、本書の隨所で試みられており、ここでそれらを一一検討することは省くが、一見して少し奇異な感じをうけるものもある。例えば五〇頁で、著者はトルコ人名斛瑟羅の原音を、イラン語系とは注記してゐるものの、Khusrav とされているが、その論據が分かりかねる。我々が知っている Khusrav の音寫、庫薩和との關係はどうなのであろうか。イラン語系と言へば、四五頁に "Nir-nieh-shih the son of Peto" とあるが、Nir-nieh-shih の漢字表記泥恆師は Narses の音寫であるから、卑路斯を Peto としたならば、泥恆師も原音の復元に統一すべきであらう。不統一と言へば、著者が先に Nusadpiti と復元された弩失畢も、第三章などでは Nu-shih-pi となっているが、私には著者がどういう意圖で、こういう使い分けをされているかが分かりかねる。

そして結論であるが、我々がそのタイトルに期待するのは、吐蕃王國と、同時代ユーラシアとを様々な角度から比較しての意見とか、吐蕃王國がその後のユーラシア史に及ぼした影響といったものの考察であろう。しかし著者はここで、吐蕃王國との時期的重複を導入部として、ヨーロッパ經濟史上の議論を展開されている。これも本書が、廣く歐米の歴史研究者を対象としている故であろうが、少なからざる違和感を否めない。

とは言え全體的に見ると、著者本来のティベットの學研究に裏うちされた吐蕃王國全史が、各時期の中央アジア史との對應のもと、或る程度の精度をもって説明されていると言えるし、時として注を活用した論考は、かなり細部にまで及んでいる。ただティベットへの著者の思い入れのためか、吐蕃の影響力を強調し過ぎるきらいも感じられる。

ところで、もとより歐米人によって先鞭がつけられた、ティベットの學なり中央アジア史ではあるが、現在では我が國の少なからざる研究が歐米以上の水準にある。ところが本書では、それらが未消化であったり看過されているきらいがある。例えば吐蕃王國史について見てみても、すでに二つの誇るべき專著をあげることができる。

佐藤長氏の『古代ティベットの歴史研究』上巻下巻（同朋舎、上巻一九五八年、下巻一九五九年）と、前記山口瑞鳳氏の『吐蕃王國成立史研

究』（岩波書店、一九八三年）である。しかし、著者は佐藤氏の研究にも、表面的に觸れているにすぎず、山口氏の業績には言及すらされていない。山口氏は一九七五年、ユネスコ東アジア文化研究センターが國外の研究者を対象に發行した、“*Oriental studies in Japan*”中の“*Tibetan studies*”を擔當されており、それ以上に東洋文庫が一九七七年以來發刊している、『スタイン蒐集ティベット語文獻解題目録』の編集責任者として、著者も御存知のはずと思う。

とは言え、歐米における從來の研究を踏まえて、吐蕃時代の中央アジア史を體系的に構成された著者の力量は尊敬する。また隨所の關連研究へのコメントは、氏の博覧ぶりを語っていろいろし、著者独自の解釋は、是認しかねるものが多いまでも、その着眼は評價したい。ではあるが、現在當該分野の研究については、綿密な史料クリティックによる、より深くかつ論理的に承認できる研究を求める我々としては、本書に對し物足りなさを禁じ得ない。

専門外を良いことに、本質であるティベット史をそっこのので、妄言を連ねたようである。著者の御寛恕を願うとともに、改めてティベット史の專家による、本書に對する論評がうかがえればと思う。

New Jersey, Princeton University Press,

1987, xxii+269pp.